二次元ぷち文庫
コール・オブ・ラト
Call of Latho
試し読み版
伊吹泰郎
表紙イラスト：鈴音れな

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『コール・オブ・ラト』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

コール・オブ・ラト
Call of Latho
伊吹泰郎
表紙／鈴音れな
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

井上祐（いのうえゆう）

読書が好きな大人しい少年。優亜に密かな想いを寄せている。

細川優亜（ほそかわゆあ）

箱入りのお嬢さまで、性の知識は皆無。読書が大好き。

ラト

祐が呼び出した褐色肌の悪魔。

内藤禎子（ないとうさだこ）

古本屋『星智堂』の店主。

「悪魔……ですか？」
戸惑いを隠しきれない井上祐へ微笑を返すのは、古本屋『星智堂』の店主、内藤禎子。
「ええ、正確には悪魔と似た存在ね。この本にはそんな者達と契約を結び、願いを叶えてもらう方法も載っているの。ある日本人の手でドイツ語から翻訳されたものでね、何度も奇怪な事件に関わってきたと伝えられているわ」
「……そう、なんですか……」
祐はカウンターの上に置かれた一冊の書物へ、改めて目を落とした。
古びて黄ばんだ表紙には、手書きで『無名祭祀書抜粋（むめいさいししょ）』とだけあり、それ以外には著者名すら記されていない。紐で綴じられた頁（ページ）は、縁のあちこちが擦り切れており、いかにも古そうだ。
「ちょっと手に取っていいですか？」
尋ねれば、「どうぞ」と愉快そうな返事。
（やっぱり僕、からかわれてる？）
そう思うのが自然だろう。だが、祐はすでにこの店へ何度も出入りしており、珍しい書物が多数あることを知っている。
それに店主にも、独特の不思議な雰囲気が漂っていた。
彼女こと禎子は、常に喪服のような黒い着物を纏う年齢不詳の美女で、どんな秘密も見

透かしそうな謎めいた笑みがよく似合う。
（なんだか心まで読まれてるみたいで……）
今日は特にその印象が強かった。何しろ、ある悩みを抱えていた祐の前へ、相談を受けたわけでもないのに、この本を出してきたのだから。
（僕……僕は……）
本を見据える少年の頭の中では、三十分ばかり前の出来事が鮮明に蘇っていた。

祐は都内の某私立校に通う生徒だ。身体つきは平均よりやや細めで、顔には野暮ったい眼鏡。外見どおりに気も弱く、決して目立つタイプではない。唯一、無類の本好きで、小学生時代から欠かさず図書委員を務めてきた点のみが、彼の個性であるといえた。
もっとも、最近は本以外、もう一つ別の事柄にも心を揺り動かされている。
（『あの子』が……次に『あの子』が来たら、絶対に誘うんだ……っ）
委員として図書室のカウンターで待機しながら、祐は何度もポケットを押さえて、中の薄い感触を確かめていた。持ってきたのは演劇『黄衣の王の謎』のチケット――。一月前に原作本を『あの子』へ貸した時、とても好評だったのである。
だが、一時間経っても、二時間経っても、
（来ない……）

図書室を閉める時間が過ぎても、彼女は現れなかった。無人となった場所を照らす蛍光灯の光がひどく寒々しい。

（ま、まあ……しょうがないか……。別に約束をしてたわけじゃないし……考えてみれば、昨日本を貸したばっかりなんだから今日来るはずはないし……そうだよ、まだ機会はあるんだから……）

失望を言い訳めいた内心でごまかし、祐は後片づけのためにカウンターを出ようとした。だがその時、不意に通路と繋がるドアが開かれる。

「あの……まだいいですか？」

中を覗きつつ、遠慮がちに尋ねてきたのは、紛れもなく『あの子』――。

「あ、うんっ、まだ大丈夫だよっ！」

祐は反射的に姿勢を正した。諦めたばかりの相手が不意に現れた緊張で、声も裏返ってしまう。

しかし、『あの子』は祐の態度の不自然さに気づくこともなく、安堵した様子で図書室に入ってきた。

「ごめんなさい。決められた時間を過ぎてしまった後で」

人懐っこい笑顔の奥に、少しだけ申し訳なさを残し、ぺこりと頭を下げる。

彼女の名は細川優亜。

今年入学してきた後輩で、大企業の社長令嬢でもある。

これまで俗世間の汚れを知らないまま育ってきたらしく、保健体育の授業の際、「赤ちゃんって、お父様とお母様が愛しあうだけで生まれるわけじゃないんですね」と本気で感心したエピソードは、今や学校中の語り種だ。

そんな浮世離れした性格の表れか、愛くるしい顔立ちの中で特に目立つのは、曇りのない大きな瞳だった。髪は腰の後ろまでまっすぐ伸びており、色も艶やか。身体つきは成長が早い段階で止まってしまったかのように繊細で、胸や腰回りも非常に薄かった。

現在、彼女が着ているのは学校の制服である紺のブレザーと赤いチェック模様のスカートだ。だが、他の女生徒と何ら変わらないはずのその格好も、恋する少年の目には輝いて見える。

祐が惹かれるのは、見た目や性格の愛らしさだけではない。優亜には誰よりも素敵な点があるのだ。

「先輩。この本、とっても感動しちゃいました。教えてくれて、ありがとうございます」

そう言って、鞄から重そうに分厚いファンタジー小説を取り出す優亜。

「もう読んじゃったの？」

祐は本気で目を丸くした。昨日貸したばかりのその本は、速読に自信のある彼でさえ、読むのに三日もかかった代物なのだ。

「はいっ」
少しだけ得意そうに、優亜はカウンターへ本を乗せる。
「昨晩から徹夜で……今日の放課後もずっと教室に残って読んでいたんです」
この本に対する愛情深さこそ、祐を魅了する一番の要素だった。とはいえ、彼女は見た目どおり丈夫な方ではない。
「あんまり無理しちゃ駄目だよ？」
祐としては心配してしまう。彼の気遣いに、純真な少女はほんのり苦笑を見せた。
「すみません。つい夢中になってしまって」
そう謝る。しかし、すぐに顔をパッと輝かせ、図書室内を見回した。
「でも、これだけ沢山本があるんですもの。やっぱり一日も無駄にはしたくないです」
そんな無邪気な仕草に誘われて、祐にも自然と笑みが浮かんできた。
「本当に細川さんは図書室が好きだよね」
「はい」と間髪入れずに明るい返事。
「優亜は図書室の本が大好きなんです。今まで手にしてきた沢山の方達と、気持ちや感動を共有できる気がするんですもの」
「あ、なるほど」
頷きながら、祐は好きなだけ本を買える裕福な少女が、わざわざ図書室へ足を運ぶ理由

（……っ!?）

「えへっ」

驚く少年の耳をくすぐるのは、指の主の悪戯っぽくもはにかんだような笑い声だ。

（ら、ラトさんが……僕のを握っちゃったっ!?）

誰かにペニスを触られるなど、祐にとって生まれて初めての経験であった。だが、その驚きが脳内を満たすより早く、ラトは動き出す。

（ぁっ……あぁああっ!?）

美少女の掌と指は、続けざまに往復して、肉棒を撫で擦った。

上へ昇った時は、裏筋や四方へ張り出したカリ首を軽く圧しながら擦り上げ、亀頭もペットを可愛がるのに似た力加減で転がす。おかげで少年は、痛みの一歩手前の強烈な疼きに襲われた直後、媚粘膜全てを蕩けてしまいそうな愉悦に覆われてしまった。

逆に下る時は、引っかかるもののないまま、スムーズに根元まで滑り落ちる。速度を増した愛撫は、亀頭を容赦なく摩擦し、エラ回りも竿の皮も勢いよく引き伸ばして、その奥の神経に極大の痺れを注ぎ込む。

（こ、これっ……自分でするより気持ちいいっ!?）

祐も年頃の少年として、オナニーをしてみたことはある。だが、ラトのテクニックはそれを軽く上回っていた。邪な魔法でもかけられたように、ペニスはジンジンしてしまう。

えっちシーン試し読み ここからスタート!

「あンっ、祐君のおちんちん、ネバネバのお汁を出してるよ……っ」
手淫を続けながら、ラトは吐息をさらに発情したものへと変えていく。
「優亜ちゃんも、自分でおマ〇コを慣らしておいた方がいいよねっ……」
「おマ〇コ……慣ら……す……？」
性の迫力へ気圧されたように、慣れない言葉を繰り返す令嬢。
「そっ。こうやると……女の子もヌルヌルしたおツユが出てくるから……あふんっ！」
説明の途中でラトの動きと声が大幅に揺らいだ。
キュッ！
細い指も、肉竿を乱暴に捻り上げる。
（うくぅっ⁉）
祐はなすすべもなく暴発しそうになった。ただでさえ固かった竿は一気に強張り、急角度を描き――そんな切迫感で、身体中からドッと粘っこい汗が噴き出す。
（で……出ちゃうぅっ！）
目の前では無数の星が瞬いていた。
「ぁ……はぁふっ……んぁっ……こ、こぉっ……するん……だよ……ぉっ……」
幸か不幸か、ラトはすぐにリズムを取り戻し、そのため祐も果てずに済んだ。だが、彼の動悸は鎮まるどころではない。

（ラトさん……オナニーを始めちゃったっ⁉）

少女が空いていた手で自らの股間をまさぐり始めたからこそ、愛撫に乱れが生じたのだ。しかも、これが夢の出来事だと信じ込んでいる優亜までが、言われるままに股間を弄り出してしまう。

「こ、こう……ですか？　ゃ……んぅ……」

座ったまま、左手で割れ目を恐る恐るなぞる美少女。つい最近までセックスがどんなものかも知らなかった彼女の手つきはあまりにぎこちなく、切なげな吐息もラトの真似をしているだけのようだ。とはいえ、自慰であることに違いはない。

（こんなの嘘だよねっ⁉　嘘に決まってるってば！）

どれだけ生々しくても、少年にはなかなか事実と認めきれなかった。その間に、またしてもラトは何かを思いついたらしい。

「んっ……まだまだ……かな……っ。じゃ……っ……サァ……ビス……するね……っ」

サービス――その妙にいかがわしい単語の後、

「ひっ……きっ⁉　んやぁ……ああっ⁉　な、何かっ……急にっ……ぃぁあああっ！」

控えめだった優亜の声が急に弾けた。小さな口がいっぱいに開かれ、薄い眉はハの字に歪み、割れ目を弄る動きも俄然活発になる。それどころか、胸元を護っていた右手までが、自発的に薄い膨らみへ指を食い込ませ出した。

「へ、変な感じがぁぁっ……ムズムズってぇっ……やはぁうっ、違うのっ！　ゾッ……ゾクッてぇえうっ！　先輩ぃいいっ……助けてくださいぃいいっ！」

床の上でヒクッヒクッと太腿を跳ねさせ、腰も前後左右にくねらせる優亜。男心をそそる鳴き声は止め処なく。自分の意思で動いているはずだが、卑猥さはラトに操られていた時の比ではなかった。

（な、何なの……!?）

急激な変化に、沸騰しかけた祐の頭はついていけない。それを見抜いてか、ラトが告げてくる。

「ボクの力でね……んっ……優亜ちゃんの身体を何十倍にも敏感にしてあげたんだよっ……」

どう？　と言わんばかりに、人外の少女は祐へしなだれかかってくる。固まった少年の背中に伝わってくるのは、瑞々しく弾力を帯びた肌の火照りと、乳房の豊かさを再確認できるビキニの丸い膨らみだ。さらに今まで気づかなかった愛液の音も、顔の高さまで這い登ってくる。

（ラトさん……濡れてるんだっ……！　オナニーしてっ、感じちゃってるんだ！）

眼前で繰り広げられる想い人の痴態と、密着してくる肉感的な肢体。淫らな挟み撃ちに、祐の心臓は破裂寸前だった。全身の水分が蒸発したように喉が渇き、一方で肉棒は我慢汁

を垂れ流し続ける。まるで身体がバラバラになったように対照的な反応だが、狂おしいほど熱いことと、圧倒的な存在感は共通していた。もはや、全てが現実であると認めるしかない。

その間に、優亜の股間もクチャックチャッと水音を奏で始めていた。不可思議な力に侵された女体は、愛液の量も尋常ではなく、みるみる床にはしたない水溜まりを広げていく。

「ぁふっ……変な感じぃっ……どんどんっ……どんどん大きくなるぅ……ぅああんっ！」

こみ上げてくる劣情に体勢を保てなくなったようで、令嬢はガクンと上半身を前に倒した。正座したままお辞儀をするような格好になったが、その間も指は止まらない。胸を揉み、秘唇もこねくり回し続ける。

その感じっぷりに、ラトは思い出したように祐へ囁きかけてきた。

「あ……んっ……そだ……っ。動けないままじゃ……ぁっ……優亜ちゃんのこと……よく見えないよねっ……」

直後、あっけないほど簡単に祐へ首から上の自由が戻ってきた。

「ぁっ……ぁああうっ⁉　つっくぅぅあっ！」

動けるようになった途端、祐の口からは情けない喘ぎが迸る。のみならず、普段なら気持ちを奥に隠してしまうおとなしげな顔全体が、快楽で歪にしかめられた。顔や声で疼きを表現できるようになると、快楽は一気に膨張した。その嵐のような混乱の中、彼はラト

へ操られたように令嬢へ目を落とす。
「ぅあぁっ……ほ、細川っ……さぁあんっ！」
少女の姿勢が変わったため、未成熟なバストもヴァギナも隠れてしまっていた。しかし、紅潮した背中や腕がクネクネ躍る様で、令嬢がいかに激しく性感帯を弄っているかは充分に察することができる。愛液の粘着質な音も、鮮明に聞こえる気がした。
垂れた黒髪が床を掃いているのがいやらしい。
後ろへ持ち上げられた尻の丸みと谷間が、浮き上がりながら揺れているのもいやらしい。
何より、
「はぁあっ……せ、先輩ぃいっ……優亜はっ……優亜はこんな感じっ……初めてですぅぅっ……やぁあんっ！　手がっ……止まらなっ……ぁへぁあぅぅっ！」
祐へ向けられた媚びるような上目遣いと声が、いやらしいことこのうえなかった。先ほど流された恐怖の涙も、新たに溢れてきた随喜のそれと混じりあい、幼顔をふしだらに飾っている。
「どぉっ……？　祐くふぅぅんっ……よっ、喜んでもらえた……かな……ぁあんっ！」
そんなラトの呼びかけに、祐は否定も肯定も返せない。ただ喘ぐのみのまま、横へと顔を向ければ、間近に顔を寄せてきていた相手と自然に目が合う。彼女もまた、二つの性器を弄ぶ興奮と愉悦で、頬を真っ赤に染めていた。潤んだ目尻を艶かしく垂らしていた。

ラトもそれが気に入ったらしく、
「んぁっ……そ……そうだよ……。ボク……感じちゃう……な……っ」
慈しむように令嬢を褒める。
鈴口からも、透明な蜜がジンワリ滲んできた。その愛液とも我慢汁ともつかない体液は、裏筋を伝い、優亜の手にまで垂れていく。そして、ニチャリという粘っこい音を皮切りに、美少女二人の肌の間で執拗に捏ね回され始める。
ズチャッ……グチャッ……ヌチュッ！
次第にコツを掴んできたのか、優亜の手淫は、我慢汁が細かく泡立つほどの速さに変わっていく。それと合わせて、ラトも次第にゆとりを失い、
「はぅんっ！　ぼ、ボクっ……今までおちんちんを人に擦ってもらったことっ……なかったのぉっ……！　ぁはあうっ……こ、こんなに気持ちいいっ……なんて……ぇぇえっ！」
濃厚なレズプレイでありながら、欲望にまみれた男と女の営みでもある。優亜とラトが繰り広げているのは、まるで騙し絵のような行為だった。
（うぅうっ！　僕っ……これ以上は……待ってられないぃぃ……いっ！）
嬉しげに粘液を滴らせるラトのペニスが、祐の中で自分のものとだぶって見える。対抗心も大きくなり、もはやジッとしているなど不可能。たとえ達することになろうと、腰を思う存分振りたくらなければ、気が変になってしまいそうだ。

こっちシーン試し読み
ここからスタート！

「っ……くぅぁあはっ！」

祐は吠えると、下半身をめいっぱい引いた。途端にカリ首が、無数の襞にからめとられる。膣内に篭った熱病さながらの体温も一段と強烈に感じられ、亀頭が蒸発させられそうだった。それでも止まる気にはなれない。

（これだっ……僕、細川さんの中へ入ってからっ……ずっとこの感じがほしかったんだ……！）

先端近くまでペニスを抜いた後は、息を整える間も置かず、再び蜜壷の中へ埋没する。

ズズン！

最初の挿入と違い、今度の突入は優亜の肢体をずり上げてしまいそうなほど力強かった。当然、自分への反動も大きい。官能の痺れが身体中を駆け巡り、一瞬目の前が真っ白になる。

「うぅあぁあくっ！」

祐が悲鳴を上げれば、

「ひぃいあああっ⁉　せ、せんぱっ……ぁああはっ！　ぁああっ……動いてるぅぅうっ！きはぁああっ！　ま、また来ましたぁぁああっ！」

優亜も嬌声を大きくする。手足を強張らせ、それがラトまで刺激したらしい。

「くぁあうっ！」

褐色の美少女は色っぽかった表情をさらに弛緩させ、プルプルとしなやかな太腿を痙攣

させた。
「ぁああっ……いいよ……ぉぉあぁんっ……！　優亜ちゃぁんっ……感じちゃうよぉぉおっ！　続けてぇぇっ！　このま、まぁぁんっ……ボクの精液っ……搾り出してぇぇえっ！」
訴えながら、ビキニのブラを上にずらし、丸見えにした乳房をがむしゃらに揉み始める。端正な膨らみが変形するほど指を食い込ませ、乳首を抓り上げて、母乳すら噴き出しかねない勢いだった。
「は、はひぃいいっ！　出してくださいいいいひっ！　せ、先輩もっ……ラトさんもぉぉおっ……赤ちゃんのもとっ……いっぱいくださひぃいいっ！」
ラトのおねだりを受けて、ますます乱れる優亜。彼女の手は、我慢汁が飛び散るほどのペースで、勃起した陰核を嬲り出す。
（ぁあっ……細川さんっ……おちんちんをあんなに扱いちゃってるよぉっ！）
大好きな少女が、自分のせいでアブノーマルな悦楽に目覚めてしまった。にもかかわらず、祐の内では罪悪感より性欲の方が強まり、律動も本格的になってしまう。ラトがよがる様も、もはや興奮の材料であった。
ジュボッ！　グポッ！　ズジュボッ！
「凄いっ、凄いいいっ！　細川さんの中っ……凄いよぉぉおおっ！」
進めば亀頭が煮えたぎる無数の肉襞にぶつかった。下がれば周囲からの吸いつきをめい

っぱい愉しめた。
「僕っっうああっ……ずっとこぉしていたいっ……よぉぉおっ！」
しかし、ただでさえ絶頂感は鼻先にチラついていたのだ。止め処ない情欲のせいで全身が敏感になりすぎて、ピストンの度に肌と擦れる空気の感触さえ、悩ましくて堪らない。もっとも、悶絶寸前なのは優亜もラトも同じらしかった。
「ぁああっ……おちんちんがっ……優亜をっ……ぁあんっ……優亜の奥ぅぅっ、叩いてますぅぅぅやぁああっ……やはぁああうっ！　きひぁぁああはっ！　さ、さっきより大きいのぉぉおっ……きちゃうぅぅぅうっ！」
顔を白濁で汚したまま、二人がかりで犯される悦びに浸る優亜。
「い……ぁ……きゃはぁあうっ！　優亜ちゃんっ……お、覚えるのっ、早すぎぃいいっ！　やはあぁっ！　ボクまでっ……ボクまでおかしくなっちゃうぅぅぁはぁあっ！」
ラトも快楽に浸りきっている。祐の願いを叶えるという当初の目的など、綺麗さっぱり忘れてしまったようだ。
「ぁああっ！　うぁああっ！　ぼ、僕ぅぅうっ！　イッちゃうよぉおおっ！」
抽送を続けながら、祐が叫ぶと、
「先輩ぃいいっ！　せんぱっ……ぁあぁあひっ！　優亜もですっ……優亜もなんですぅぅうっ！　ぁあああんっ！　優亜ぁあっ……おちんちんでイッちゃうぅぅうぅっ！」

「ボクもぉぉぉぁあっ！　ボクもっ……ザーメン噴き出しへぇぇっ……イッちゃうぅぅぅぁぁぁはぁぁっ！」

美少女二人も恥知らずなよがり声を重ねる。彼女らは仰け反り、危なっかしく腰を浮かせながら、揃ってすがるような表情を祐へと向けてきた。

「……っ!!」

突き刺さる二対の眼差しに、祐は心臓を鷲掴みにされた気がした。過剰な脈動で全身へ沸騰寸前の血が送り出され、それが彼にラストスパートをかけさせる。

「イこうよぉぉっ！　みんなで一緒にぃいいっ……イっ……イクぅぅぁぁあっ！」

咆哮しつつ、祐は白濁の塊が尿道の半ばまで這い登ってきたのを感じ取っていた。堰き止め――きれない。

「イッ……ぅぅぅぁぁぁぁぁっ！」

彼は渾身の力で、己を優亜の最深部へ叩きつけていた。行き場を求め、子宮口まで貫こうとするような荒々しい腰遣い。それが優亜の胎内に爆発的な悦楽を流し込み、ラトの肉竿へまで突き抜けた。

直後、少女達の肢体は立て続けに硬直する。

「あひぃぃぃっ!?　イッ……イッちゃ……ぁぁぁっ……はっ……ぁぁぁひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぁぁぁぁぁぉぉぉっ！」

「出る出るっ……出ちゃうぅぅうっ！　せぇえき出ちゃうよぉおぉうぅんぁぁあへぁぁあはははぁぁぁあああああっ！」

ドプブッ！　ビュルッ！　ビチャッビチャチャッ！　ビュバァァァッ！

ラトの擬似ペニスからは、宣言どおりに白い子種が二度三度と吐き散らされた。濁汁の塊は優亜の右肩から薄い胸、臍へと飛び散り、きめ細かな肌を無差別に汚していく。

「ひっ……は……ぁぁあっ……どぅし……よっ……止まらない……よぉぉおっ！」

さすがは人外の存在だった。悲鳴と共にラトから出される白濁液は、濃さや勢いだけでなく、一発ごとの量も常識外れで、あっという間に優亜をドロドロのネバネバにしてしまう。

「はぁぁあっ……あひっ……ひっ……ひぉっ……ぉぉぉ……っ」

ザーメンの熱と性臭に身体の芯まで侵食されたように、優亜もビクビクと痙攣を続けていた。だが、すくなくとも嫌がる素振りはない。子種で溺れそうになりながら、握った勃起クリトリスを自分の方へ向け続けている。

そんな光景を見せつけられたうえ、剛直を情熱的に絞り上げられたのだから、祐も耐えられるはずがない。

「ひ……ぃぉっ……ぉ……ほっ……細川っさぁぁあんぅつぅぅぁぁぁあっ！」

彼は滾らせた欲望を、亀頭の小さな一点から迸らせていた。

ゴププッ！　ドクドクドクッ！　グビュルルルゥゥッ！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/